

30

小中連携の英語教育

上田佳代 (奈良育英中学校・高等学校)

1. 研究の目的と意図

本学園の小学校での英語活動、英語教育はかなり前から行われてきている。しかしその取り組みの内容や方法について、中学校の教師はほとんど理解していなかった。中学1年生の英語入門期、導入期において、生徒のこれまでの学習背景を反映することなく授業を展開してきた。しかし併設小学校からの入学生が中学のクラスに占める割合は高くなく、公立小学校から入学してくる生徒が大半であったため、中学から初めて英語を学ぶという姿勢で授業に取り組んできたが、問題意識は感じなかった。

しかし最近では、ほとんどの小学校で総合的な学習の一環などとして英語が学ばれている。また、新学習指導要領では小学校5・6年生で外国語活動が必修となっている。早期から英会話教室に通い、英語を学んでいる生徒も少なくない。つまり1年生は、何らかの形で英語教育を受けて中学に入学してくるようになった。「彼らはどのような英語教育（活動）を経験してきたのであろうか」「今までと同じ入門期の指導でいいのだろうか」と考えるようになった。また、これから学び始めるという1年の1学期当初から、英語に苦手意識を持っている生徒も少なくない。

中学の英語教師は、小学校でどのような英語活動を行っているのかを知ることで新入生が得意としていること、できること、できないことが明確に把握できるのではないかと考えた。得意なことを活用しながら中学の学習を深めることはできないだろうか。また中学校の学習内容や生徒のつまずきの傾向を知った上で小学校の英語授業を計画し、展開することは小中の英語教育をスムーズに連携させられるのではないかと考えた。

小学校英語活動の延長線上に中学の英語学習を位置づけ、どのようにつないでいくべきかを考えた。

2. 小学校での授業づくり

本学園の英語教育（活動）は1年生から6年生まで、週2時間行われている。1時間はALTとのTeam-Teaching、もう1時間は日本人教師によるソロ授業である。（小1はT・Tのみ1時間）今年度、2年生、4年生のソロ授業と6年生のTeam-Teaching授業を担当した。授業案を作成する際の考えた観点は以下のとおりである。

① 動機付け

授業を計画し、展開する上で児童の参加意欲を高めることは重要である。どのような内容であれば児童が意欲的に活動するかは、学年によってことなる。2年生では、英語の音やリズムを意識し、手遊びや体を動かす活動が有効である。振り付けやジェスチャーを交えた歌や、チャンツが効果的である。4年生では、英語のリズムや音だけでなく、文字に対しても興味を示すため、チャンツや歌に加え単語カードを使ったカルタやビンゴゲームが効果的である。高学年になると、ゲームよりもペア活動や、自己表現に重点を置いた活動が好まれる。

② 言語材料と語彙

季節や行事をもとに、できるだけ実生活に即したものを選び、使用場面を意識して設定した。今年度の授業で取り扱ったものは以下の通りである。

4月	5月	6・7月	9月	10月
イースター 色 挨拶	天気 感情を表す語	夏の活動 動物	果物 野菜 色 形	ハローウィーン 動作を表す語
11月	12月	1月	2・3月	
スポーツ 動作を表す語	クリスマス 体調を表す語	季節 月の名前	劇の練習	

③ 聞かせること

授業の活気という面では、多く発話させるほうが印象はよく思える。しかし理解できていない言葉を音声として発話するのは難しい。自信をもって大きな声を出している児童もいるが、全く口が動いていない児童も少なくない。発表や発話という自己表現につなげるために、多量のインプットを目指した。特に多く用いたのは絵本とゲームである。絵本は、各場面にあった絵で英語の理解を助けてくれ、同じ語彙や表現が繰り返してでくるものも多い。英語特有のリズムやイントネーションに慣れ親しませるには効果的である。OXFORDのGraded Readerは平易な語で構成されており、活用できた。また習得させたい表現や語彙を用いてグループやペアで対決するゲームも効果的であった。

④ 読むこと

小学校英語から中学英語への移行の中で、大きなウェイトを占めるのが文字（書く活動）である。中学での英語学習におけるつまずきの中で、大きな要素となるものとして、文字や文をかくことが挙げられる。小学校の英語活動のなかに、中学での学習を意識した活動を取り入れることにした。

低学年では、アルファベットに親しませることを取り入れた。手や体でアルファベットを表したり、背中に書かれた文字をリレー形式で伝え、アンカーが黒板のカードを取るといったゲームをしたり、活動の一環として取り組んだ。

中学年では、絵と文字のマッチングというようなゲーム的要素を加えた活動や、フォニックスのルールを少し取り入れ、単語を読む練習などを行った。

6年生ぐらいになると、知的好奇心を満たすような活動が好まれる。自分で英語を読めるようになりたいという気持ちも高まってくる。高学年は、自己表現のなかで、文字の書き写し、ペア活動やグループ活動で英文を読むことを意識した。

学年によって、取り組んだレベルは違うが共通しているのは、文字やつづりそのものを覚えることが目的ではなく、ゲームや活動の一環として行ったということである。

3. 中学校での授業づくり ー生徒の得意なことを生かしてー

小学校で、音声重視とはいえ学んでいる文法項目はかなり広く、一般動詞（命令文を含む）、形容詞、位置を表す前置詞、月の名前、曜日、色、天気、時間の言い方、現在進行形など中学1年生で学ぶことはほぼ学習していると言っても過言でない。しかし覚えることを求められていないし、テストやプリントなどの演習をしていないため、使わなければ時間がたつにつれ忘れてしまう。

中学での英語学習は、簡単な挨拶や自己紹介から始まることが多く、そしてアルファベットの練習に入っていく。教科書の順に授業を進めると、「私は～です。」「これは～です。」という、be 動詞を用いた文を学ぶことから始まることが多く、一般動詞や、現在進行形などの動作を表す語を習うのはかなり後になってからである。しかしこれらは小学校の学習では、かなり親しんでいる項目である。入門期に、これからの英語学習の基本となる音読やペアワークの仕方を学ばせる中で、こういった生徒の慣れた英語表現を、Q&A活動や、リスニング活動として取り入れることが必要であろう。教科書の配列にとらわれず、何度も繰り返し学習し、使用させることが語学の習得には必要である。

フォニックス

中学1年生は、小学校でさまざまな生活に関係した語を学んできている。彼らの知っている単語、聞いてわかる単語は、かなりの数であろうと推測される。しかし、それらの語を文字で表すことはできないことが多い。聞き取れる語彙を、書くことのできる語彙に変えていくためには、音と文字の関連を教えることが必要である。そのためにフォニックスは有効であろう。また、英語を正確に発音させる手助けにもなる。小学校で学んできたスポーツや食べ物、動物など身近な語を読ませながら、音と関連づけ、正しく単語をつづることができるよう基本的なルールを習得させたい。

4. よりよい連携をめざして

小学校の英語と一口にいっても、低学年と高学年では目指すものや、児童の学び方が発達段階に応じて必然的に異なる。低学年はわからない言葉があっても、絵や動作などから推測し、理解しようと

する能力が高い。音をまねることやまるまる覚えることが得意である。文字通り全身で学ぶというスタイルで、「楽しい」と感じさせることが必要である。(大半は)英語との人生初の出会いでもあり、ここで肯定的な印象を抱かせることが、その後の学習に影響をあたえるのではないかと思う。中学年から高学年にむけては、コミュニケーションの素地を意識し、ペア活動や発表を通じて相手の意見を受け入れたり、理解したりすることと、自分を表現する姿勢をはぐくんでいくことを目指したい。また英語活動から英語学習への橋渡しとなる文字の学習についてもフォニックスを中心に、絵本を自分で読めるように6年生頃から取り組みはじめてもよいと思われる。

中学の英語教育では、生徒達が学んできたことが生きる授業を展開するべきだ。さまざまな語彙や文章を覚えてきている。それを応用できるように整理してやるのが中学での学習の役割ではないだろうか。

1年間という短い期間ではあったが、中学の英語教師として小学校の英語の授業を担当するなかで、当初は中学の学習を前倒しで、小学校に導入することを考えて取り組んだ。しかし、うまくいかないことが多かった。1年の試行錯誤を経て思う、小中連携の英語教育に必要なこととは、小学校の取り組みから中学校の学習を見直し、中学校の学習を見据えて、小学校の英語学習を考えるという両方の視点である。